

「そのころ、皇帝アウグストゥスから全領土の住民に、登録せよとの勅令が出た(ルカ 2:1)。

広大なローマ帝国全域でおこなわれた人口調査は(2:2)、人頭税を取りこぼしなく徴収するためのもの。住民登録のためにヨセフは身重のマリアを連れ、ガリラヤから本籍地のベツレヘムへ難儀な旅をした(2:4)。

人口調査が可能なのは帝国内が安定して「平和」だからだろう。税金取られるのは癪だし、帝国の覇権を嫌悪するが、戦争状態よりはいいか。

「そのころ(2:1)」のローマ帝国、私はけっこう好きだ。多民族国家だから、後代に形成される国民国家のような人種偏見は少なく、異邦人を賤視する宗教的妄想もない。

戦争が抑えられた「平和」は、法という約束事と強大な軍事力があって実現するようだ。

羊飼いらが天使から「救い主誕生(2:11)」の声を聞いた時、天の大軍が「いと高きところには栄光、神にあれ、地には平和、御心に適う人にあれ(2:14)」と讚美した。

ローマ帝国軍も「ローマ(地)の平和／Pax Romana」という義を唱えるが、天の大軍にはどんな武器があったのか。まさか救世軍のような聖書や楽器ではあるまい。「そのころ(2:1)」のことなので、ローマ軍のような長い槍や戦車か。

羊飼いらは天使に出会って驚愕し(2:9)、「あなたがたへのしるし(2:12)」と告げられても、呆然として動かなかったかも。ところが天の大軍(2:13)が加勢したので、「救い主(2:11)」や「地には平和(2:14)」が夢物語ではなく、俄然リアルなものになった。

とはいえ、財産である羊の群を夜の野(2:8)に放置しておくのはいささか心配。暫し逡巡した後(2:15)、決意して闇夜をベツレヘムの町へひた走った(2:16)。

羊飼いらは何を思いながら走ったか。「飼い葉桶に眠る乳飲み子」が自分たちへのしるし(2:12)だと聞いてはいるが、脳裏には「天の大軍」の残像が巡っていた。彼らの期待は、神の強大な力によって「神の国(支配)」の秩序が実現すること。

羊飼いらは「マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてあった乳飲み子を探し当てた(2:16)」。あれ、天使が言ったことそのままじゃないか、と啞然となる。

羊飼いらが「飼い葉桶の救い主」と出会っても、「救い」の意味は分らなかつたらう。ただ彼らは天使の言葉と実体験をそのまま人々に知らせた(2:17)。

理解できずとも、自分たちへの「しるし」と出会うために決断し、財産を野に放置して闇夜を走った。そして東方の占星術学者らが晴ればれと故郷へ帰ったように(マタイ 2:12)、羊飼いらもまた「神をあがめ、賛美しながら帰って行った(ルカ 2:20)」。

「あなたがたへのしるし」が、家畜臭い飼い葉桶に寝ている(2:12)。世の人々を納得させ、熱狂させる「天の大軍」とはおおよそ正反対な「救い」の実相。

虚ろな目をして希望なき寒夜を過ごす羊飼いら(2:8)を転換させた「救いのしるし」。枠にはまって動けない人間をひっくり返して救いへ導くしるしなのだ。

世界平和は人間の切なる願いだが、それを実現する私たちの第一歩は、私のために神がここに来て下さった救い。神の御子が、私の罪と引き換えに命を投げ出す「しるし」であるクリスマス。

これほどに私は顧みられ、愛されている。一人ひとりの存在は、イエスの命よりも重いらしい。



《おまけのひとこと》

飼い葉桶に眠る乳飲み子 傍らに母がいて父がいる 反芻する羊や牛がいて(食可) 天使までいる
クリスマス飾りのような平穏な空気 解釈せずとも この匂い この肌合い 救いのリアリティだ